

# 遺稿

遺稿

泉鏡花

青空文庫



この無題の小説は、泉先生逝去後、机辺の篋きょうてい底ていに、夫人の見出されしものにして、いつ頃書かれしものか、これにて完結のものか、はたまた未完結のものか、今はあきらかにする術すべなきものなり。昭和十四年七月号中央公論掲載の、「縷紅新草るこうしんそう」は、先生の生前発表せられし最後のものにして、その完成に尽つくくされし努力は既に疾やまいを内に潜めいたる先生の肉体をいたむる事深く、その後再び机むかに對われしこと無かりしという。果して然しからばこの無題の小説は「縷紅新草」以前のものと見るを至当とすべし。原稿は

やや古びたる半紙に筆と墨をもつて書かれたり。紙の古きは大正六年はじめて万年筆を使用されし以前に購あがなわれしものを偶々たまたま引出して用いられしものと覚しく、墨色は未だ新しくしてこの作の近き頃のものたる事を証あかす。主人公の名の糸七は「縷紅新草」のそれとひとしく、点景に赤蜻蛉あかとんぼのあらわるる事もまた相似たり。「どうもこう怠ぼけていてはしかたが無いから、春になったら少し稼いごうと思つています。」と先生の私に語られしは昨年の暮の事なりき。恐らくこの無題の小説は今年のはじめに起稿されしものはあらざるか。

雑誌社としては無題を迷惑がる事察するにあまりあれど、

さりとして他人がみだりに命題すべき筋合すじあいにあらざるを以て、強しいてそのまま掲出すべきことを希望せり。

(水上瀧太郎附記)

伊豆の修しゆ禅ぜん寺の奥の院は、いろは仮名四十七、道しるべの石なわてをなわて、山の根、村口に数えて、ざつと一里余りだと言う、第一のいの碑はたしかその御寺の正面、虎こけい溪き橋きょうに向つた石段の傍にあると思う……ろはと数えて道順にのあたりが俗に釣橋釣橋と言つて、渡ると小学校がある、が、それを渡らずに右へ廻るとほの碑に続く、何だか大根畠から首をもたげて指示ゆびさしをするようだ

けれど、このお話に一寸要があるので、ちよつと頬ほ被おかむりをはずして申しておく。

もう温泉場からその釣橋へ行く道の半ばかりは、一方が小山のすそ裾、左がこながれ小流を間にして、田畑になる、橋向うへ廻ると、山の裾は山の裾、田畑は田畑それなりの道続きが、おおうね大畝りして向うに小さな土橋の見えるあたりから、おのず自から静かな寂しい参拝道となつて、次第に俗地を遠ざかる思いが起るのである。

土地では弘法様のお祭、お祭といつては春秋二季のだいしき大式日、じつ月々の命日は知らず、ふだん不断、この奥の院は、長々とらせん螺線をゆるく田畝でんぼの上にめぐ繞らした、ところどころ処々、かやすすき萱薄、草々の茂みに立たたずったしるべの石碑を、杖笠を棄たててたたすたたすたたす順礼、どう道しやの姿に

見せる、それとても行くとも販かえるともなくけいぜん然として独り佇たたずむばかりで、往来の人は殆ほとんどない。

またそれだけに、奥の院は幽邃ゆうすい森巖しんげんである。噉あぜ道を桂川の上流に辿ると、迫る処怪石かいせき巨巖きよがんの磊らい々たいたるはもとより古木大樹千年古き、楠なん槐かいの幹も根もそのまま大巖に化したようなのが纍々と立聳たちそびえて、忽たちまち石門砦高く、無齋式、不精進の、わけては、病びょうしん身たりとも、がたくり、ふらふらと道わるを自動車にふんぞつて来た奴等を、目さえ切塞きりふさいだかと驚かれる、が、慈救の橋は、易々と欄らんかん干づきで、静しずかに平かな境内へ、通行を許さる。

下車は言うまでもなからう。

御堂は颯と松風よりも杉の香檜かひのきの香の清すがすが々々しい森しんしん々々とした樹立こたちの中に、青龍の背をさながらの石段の上に玉面の獅子頭の如く築かれて、背後の大碧巖だいへきがんより一筋水晶の滝が杖を鳴らして垂直に落ちて仰ぐも尊い。

境内わきの、左手の庵室、障子を閉して、……ただ、仮に差置いたような庵ながら構かまえは縁が高い、端はしちか近きんに三さん宝ぼうを二つ置いて、一つには横綴の帳一冊、一つには奉納の米袋、ぱらぱらと少しこぼれて、おひねりというのが捧げてある、真中に硯箱が出て、朱書が添えてある。これは、俗名と戒名と、現当過去、未来、志す処の差によって、おもいおもいにその姓氏仏号を記するのであろう。「お札ふだを頂きます。」



——お札は、それは米袋に添えて三宝に調えてある、そのままでもよかつたらうが、もうやがて近い……年頭御慶の客に対する、近來流行の、式台は悪わるつめた、冷ひやく外套を脱ぐと嚏くさめが出そうなのに御ご内証ないしょうは煖炉だんろのぬくもりにエヘンとも言わず、……蒔絵まきゑの名札なふだう受けが出ているのとは些ちと勝手が違うようだから——私ども夫婦と、もう一人の若い方、と云つて三十を越えた娘……分か？ 女房の義理の姪、娘が縁づいたさきの舅の叔母の従弟の子で面倒だけれど、姉妹分の娘だから義理の姪、どうも事実のありのままにいうとなると説明は止むを得ない。とに角、若いから紅氣こうきがある、長襦袢つまの褻つまがずれると、縁が高いから草履を釣られ気味に伸上つて、

「ごめん下さいまし。」

すぐに返事のない処へ、小肥りだけれど気が早いから、三宝越に、眉で覗くように手を伸ばして障子腰を細目に開けた。

さんきみじり

山気は翠に滴つて、詣ずるものの袖は墨染のようだのに、向つた背戸庭は、一杯の日あたりの、ほかほかとした裏縁の障子の開いた壁際は、留守居かと思う質素な老僧が、小机むかにむか対い、つぐなむかんで、うつしものか、かきものをしてござった。

「ごめん下さいまし、お札を頂きます。」

黒い前髪、白い顔が這うばかり低く出たのを、蛇体と眉もひそ顰めたまわず、目めがねごし金越まつげの睫の皺が、日南ひなにとろりと些ちと伸びて、

「ああ、お札はの、御随意にの預かつしやつてようござるよ。」

と膝も頭も声も円い。

「はい。」

と、立直つて、襟の下へ一寸端を見せてお札を受けた、が、老僧と机ばかり円光の裡うちの日だまりで、あたりは森閑しんかんした、人氣のないのに、何故か心を引かれたらしい。

「あの、あなた。」

こうした場所だ、対あいて手は弘法様の化身かも知れないのに、馴なれなれたいことという。

「お一人でございますか。」

「おお、留守番の隠居爺じや。」

「唯たったお一人。」

「さればの。」

「お寂しいでしょうね、こんな処にお一人きり。」

「いや、お堂裏へは、近い頃まで猿どもが出て来ました、それはもう見えぬがの、日和ひよりさえよければ、この背戸へ山鳥が二羽ずつで遊びに来ますで、それも友になる、それ。」

目金がのんどりと、日に半面に庭の方へ傾いて、

「巖の根の木瓜ぼけの中に、今もの、来ていますわ。これじゃ寂しいとは思いませんねじゃ。」

「はア。」

と息とともに娘分は胸を引いた、で、何だか考えるような顔をしたが、「山鳥がお友だち、洒落てるわねえ。」と下向げこうの橋を渡

りながら言った、——「洒落てるわねえ」では困る、罪障ざいしょうの深い女性は、ここに至つてもこれを聞いても尼にもならない。

どころでない、宿へもと皈ると、晩餉ばんげの卓子台ちゃぶだいもやい、一銚子の相しょう伴ばん、二つ三つで、赤くなつて、ああ紅木瓜になつた、と頬おき辺をおき圧えながら、山鳥の旦那様はいい男か知ら。いや、尼どどころ処か、このくらい悟り得ない事はない。「お日和ひよりで、坊さんはお友だちでよかつたけれど、番傘はお茶を引きましたわ。」と言つた。

出掛けに、実は春の末だが、そちこち梅雨入模様で、時々気まぐれに、白い雲が薄墨の影を流してばらばらと掛る。其そこ処で自動車の中へ番傘を二本まで、奥の院御参詣結縁けちえんのため、「御縁日だとこの下で飴を売る奴だね、」「へへへ、お土産をどうぞ。」

と世馴れた番頭が真新しい油もまだ白いのを、ばりばりと綴とじわく粹くをはずして入れた。

贅沢を云つては悪いが、この暖さと、長閑のどかさの真中には一降ひとふり来たらばと思つた。路みち近い農家の背戸に牡丹の緋に咲いて菴しべの香に黄色い雲の色を漉たえたのに、舞う蝶の羽袖はねのびの影が、仏前に捧かぐる妙たえなる白い手に見える。遠方の小さい幽かすかな茅屋を包んだ一むら竹の奥深く、山はその麓なりに咲込んだ映山紅に且かつ半ば濃かい陽かげろう炎あまのかかつたのも里親しき護摩ごまの燃ゆる姿であつた。傘さしてこの牡丹た丹たに匂たたず、すぼめて、あの竹藪を分けたらばと詣よずる道すがら思つたのである。

土手には田芹たぜり、露ふきが満ちて、蒲公英たんぽぽはまだ盛りに、目に幻のあ

の白い小さな車が自動車の輪に競って飛んだ。いま、その販<sup>かえ</sup>りが  
けを道草を、<sup>ざる</sup>筧に洗つて、縁に近く晩の卓子台を囲んでいたが、

——番傘がお茶を引いた——

おもしろい。

悟つて尼にならない事は、<sup>およ</sup>凡そ女人以上の糸<sup>いと</sup>七<sup>しち</sup>であるから、  
折しも欄干越の桂川の流<sup>ながれ</sup>をたたいて、ざつと降<sup>ふり</sup>出した雨に気競つ  
て、

「おもしろい、その番傘にお茶をひかすな。」

宿つきの運転手の馴染なものも、ちようど帳場に居わせた。

九時頃であつた。

「さつき番傘の新造を二人……どうぞ。」

「ははは、お楽たのしみで……」

番頭の八方無碍むげの会釈をして、その真新しいのをまた運転手の傍へ立掛けた。

しばらくして、この傘を、さらさらと降る雨に薄白く暗夜やみよにさして、女たちは袖を合せ糸七が一人立ちで一畝ひとつねの水田みずたを前にしてイんだ処は、今しがた大根畑から首を出して指ゆびさしをした奥の院道の土橋はるかを遥に見る——一方は例の釣橋から、一方は鳶とんびの嘴くちばしのように上へ被かぶさった山の端を潜つて、奥在所へさながら谷のように深く入る——俗に三方、また信仰の道ちなに因んで三宝ヶ辻と呼ぶ場所である。

——衝つき進むエンジンの音に鳴留なきやんだけれども、真上に突出つぎでた



山の端はに、ふアツふアツと、山臥やまぶしがうつむけに息を吹掛ふきかけるよ  
うな鼻ふくろうの声を聞くと、女おんなれん連れんは真暗な奥在所へ入るのを可厭いやが  
つた。元來宿を出る時この二人は温泉街の夜店飾りの濡灯ぬれびいろ色と、  
一寸野道で途絶えても殆ど町続きに齊ひとしい停車場あたりの靄もやの燈  
を望んだのを、番傘を敲たたかぬばかり糸七が反対に、もの寂しい  
ろはの碑を、辿つたのであつたから。

それでは、もう一方奥へ入つてからその土橋に向うとすると、  
余程の暇を抜けなければ、車を返す足場がない。

三宝ヶ辻で下りたのである。

「あら、こんな処で。」

「番傘の情人に逢わせるんだよ。」

「情人ツて？ 番傘の。」

「蛙だよ、いい声で一面に鳴いてるじやあないか。」

「まあ、風流。」

さ、さ、その風流と言われるのが可い厭やさに、番傘を道具に使つた。第一、雨の中に、立った形は、うしろの山際に柳はないが、小野道風何とか硯すずりを悪く趣向にしたちんどん屋の稽古をすと思われては、いいようは些ちとぞんざいだが……ごめんを被こうむつて……癩しやくさに障る。

糸七は小兒こどものうちから、妙に、見ることも、聞くことも、ぞつこん蛙といえは好きなのである。小学最初級の友だちの、——現今は貴族院議員なり人の知った商豪だが——邸やしきが侍町にあつて、

背戸せどの蓮池で飯粒で蛙を釣る、釣れるとも、目をぱちぱちとやって、腹をぶくぶくと膨ふくらます、と云うのを聞くと、氏神の境内まで飛ばないと、蜻蛉とんぼさえ易たやすくは見られない、雪国の城下でもせせこましい町家に育ったものは、瑠璃るりの丁斑魚めだか、珊瑚の鯉、五色ごしきの鮎ふなが泳ぐとも聞かないのに、池を蓬菜ほうらいの嶋に望んで、青蛙を釣る友だちは、寶貝のかくれ蓑を着て、白銀しろがねの糸を操るかと思つた。学問半端にして、親がなくなつて、東京から一度田舎へ返つて、朝夕のたつきにも途方に暮れた事がある。

「ああ、よく鳴いてるなあ。」——

城下優しい大川の土手の……松に添かたう片側町かわまちの裏へ入ると廃敗した潰れ屋のあとが町中に、棄すてな苗えの水田みずたになつた、その田の

名には称とえないが、其処をこだまの小路という、小玉というの  
 家跡か、白昼も寂然しんとしていて訝こだまをするか、濁つて呼ぶから女の  
 名ではあるまいが、おなじ名のきれいな、あわれな婦おんながここで自  
 殺をしたと伝えて、のちのちの今も尚なお、その手提灯が闇夜に往  
 来をするといった、螢がまた、ここに不思議に夥おびただ多しい。

が、提灯の風説に消されて見る人の影も映さぬ。勿論、蛙なぞ  
 聞きに出掛けるものはない。……世の暗さは五月闇さつきやみさながらで、  
 腹のすいた少年の身にして夜の灯でも繁華な巷は目がくらんで瘦や  
 脛せはぎも振ねじれるから、こんな処たよを使つては立樹もたに凭もたれて、固もとからの  
 耕地あかしでない証やれがきには破垣みやたのまばらに残つた水田じつを熟みずたと闇夜に透か  
 すと、鳴くわ、鳴くわ、好きな蛙どもが装上つて浮かれて唱う、

そこには見えぬ花菖蒲、  
かきつばた 杜若、  
こうほね 河骨も卯の花も誘われて来  
 て踊りそうである。

此処だ。

「よく、鳴いてるなあ。」

世にある人でも、歌人でも、ここまでは変りはあるまい、が、  
 情ない事には、すぐあとへ、

「ああ、嘸さぞお腹はらがいいだろう。」

——さだめしお飯まんまをふんだんに食つたろう——ても情ない事をい  
 う——と、喜多八がさもしがる。……三嶋の宿で護摩ごまの灰に胴巻を  
 抜かれたあとの、あわれはここに弥次郎兵衛、のまず、くわずの  
 まず、竹杖にひよろひよろと海道を辿りながら、飛脚が威勢よく

飛ぶのを見て、その満腹を羨うらやんだのと思いは齊ひとしい。……又膝栗毛げすで下司おぼしめばる、と思召おぼしめしも恥はかしいが、こんな場合には絵言葉まき巻まきものや、哲理、科学の横よこ綴とじでは間に合あわない。

生芋かけらの欠片おぼさえ芋屋おぼの小母おぼさんが無代では見向きもしない時は、人間うぶめよりはまだ氣げの知れない化ばけものの方に幾分ひようらいか憑ひ頼らいがある、姑獲女あかんぼを知らずや、嬰あかんぼ児あかんぼを抱かかされても力餅ちからもちが慾ほしいのだし、ひだるさきんぴらにのめりきんぴらそうでも、金平式きんぴらの武勇伝ぶゆうでんで、劍術けんじゆつは心得たから、糸七いとせちは、其処そこに小提灯せうていとうの幽霊ゆうれいの怖おそれはなかつた。

奇異きいともいおう、一寸ちよつと微妙びまうなまわり合あわせがある。これは、ざつと十年も後の事ことで、糸七いとせちもいくらか稼かせげる、東京とうきやうで些いささかながら業わざを得た家業けあわざだから雑誌あつちお誂あつちえの随筆ずいひつのようようで、一度話いさした覚おぼ

えがある。やや年下だけれど心置かれぬ友だちに、——ようから、  
本名俳名も——谷活東たにかつとうというのが居た。

作意で略ほぼその人となりも知れよう、うまれば向嶋むこうじま小梅業こうめなりひ  
平橋辺の家持いえもちの若旦那が、心がらとて俳三昧おちぶに落魄おちぶれて、牛  
込山吹町の割長屋、薄暗く戸を鎖とぎし、夜なか洋燈をつける処どころか、  
身体からだにも油を切らしていた。

昔からこうした男には得てつきものの恋がある。最も恋をする  
だけなら誰がしようと御随意で何処からも槍は出ない。許いいなすけ嫁よめ  
の打壊ぶつこわれだとか、三社様の祭礼に見初めたとかいう娘が、柳橋  
で芸妓げいしやをしていた。

きて、その色にも活計かつけいにも、寐起ねおきにも夜昼の区別のない、迷め晦朦いかいもうろう朧として黄昏男と言われても、江戸児えどっこだ、大気たいきなもので、手ぶらで柳橋の館——いや館は上方——何とか家やへ推参する。その芸しやの名を小玉といった。

借りたか、攫とったか未だ審つまびらかならずであるが、本望だというのに、絹糸のような春雨でも、襦袢じゆばんもなしに素裕すあわせの膚はだうす薄うすな、と畜生め、何でもといって貸してくれた、と番傘に柳ばしと筆ぶとに打つけたのを、友だち中へ見せびらかすのが晴曇りにかかわらない。況いわんや待望の雨となると、長屋近間の茗荷みょうが畠がばたけや、水車しみずだになんぞでは気分が出ないとまだ古むかしのままだった番町へのして清水谷へ入り擬宝珠ぎぼしのついた弁慶橋で、一振柳を胸にたぐって、ギクリ



となつて……ああ、逢いたい。顔が見たい。

こたまだ、こたまだ

こたまだ……

その辺の蛙の音が、皆こたまだ、こたまだ、と鳴くというのである。

唯、糸七の遠い雪国のその小提灯の幽霊の徜徉さまよう場所が小玉小路、断然話によそえて拵えたのではない、とすると、蛙ちなに因ちなんで顯著なる奇遇である。かたり草、言ことの花は、蝶、鳥の翼、嘴くちばしには限らない、その種子は、地を飛び、空をめぐつて、いつその実を結ぼうも知れないのである、——これなども、道芝、仇花の露にも過ぎない、実を結ぶまではなくとも、幽かすかな葉を装はかない儂い色を彩

っている、ただしそれにさえ少からぬ時を経た。

明けていうと、活東のその柳橋の番傘を随筆に撰んだ時は、——それ以前、糸七が小玉小路で蛙の声を聞いてから、ものの三十年あまりを経ていたが、胸の何処どこかに潜み、心の何処にかくれたか、翼なく嘴なく、色なく影なき話の種子は、小机からも、硯からも、その形を顕あらわさなかつた、まるで消えたように忘れていた。

それを、その折から尚なお十四五年のち、修禪寺の奥の院路みち三宝ヶ辻たたずにイんで、蛙を聞きながら、ふと思出おもいだした次第なのである。

悠久なるかな、人心の小さき花。

ああ、悠久なる……

そんな事をいったって、わかるような女おんなれん連れんではない。

「——一つこの傘を廻わして見ようか。」

糸七は雨のなかで、——柳橋を粗ざつと話したのである。

「今いった活東が弁慶橋でやったように。」

「およしなさい、沢山。」

と女房が声ばかりでたしなめた。田の縁に並んだが中に娘分が居ると、もうその顔が見えないほど暗かった。

「でも、妙ね、そういうえば……何ですって、蛙の音が、その方には、こがれる女の小玉だ、小玉だと聞こえたんですって、こたまだ。あら、真個ほんとうだ、串じょうだん戯ぢやないわ、叔母さん、こたまだ、こたまだッて鳴いてるわね、中でも大きな声なのねえ、叔母さん

。」「

「まったくさ、私もおかしいと思つていゝほどなんだよ、氣の所<sup>せ</sup>為<sup>い</sup>だわね、……氣の所為といえは、新ちゃんどう、あの一齊に鳴く声が、活東さんといやしなひ？……

かつと、かつと、

かつと、……

それ、揃つて、皆して……」

「むむ、聞こえる、——かつと、かつと——か、そういえば。——成程これはおもしろい。」

女房のことなどは滅多に応といつた事のない奴が、これでは済むまい、蛙の声を小玉小路で羨んだ、その昔の空腹を忘却し

て、凶に乘気味のりぎみに、田の縁へ、ぐつと踞しゃがんで聞込ききこむ気で、いきなり腰を落しかけると、うしろ斜めに肩を並べて廂ひさしの端を借りていた運転手の帽子を傘で敲たたいて驚いたのである。

「ああ、これはどうも。」

その癖くせ、はじめは運転手が、……道案内の任がある、且かつは婦お人なれん連なれんのため、頭に近い梟まよけの魔除まよけの為に、降るのに故わざと台ちよつとから出て、自動車に引添ひきぞって頭から黒扮装の細身きつに腕を組たんだ、一寸ちよつと探偵小説のやみじあいなわての挿絵なわてに似た形で屹きつとしてゐたたずたいでいたものを、暗夜なわての驟なわての寂しさに、女連ななれんが世辞を言たつて、身近におびき寄せたものであつた。

「ごめんなさい、熊沢さん。」

こんな時の、名も頼もしい運転手に娘分の方が——そのかわり糸七のために託わびをいって、

「ね、小玉だ、小玉だ、……かつと、かつと……叔母さんのいうように聞こえるわね。」

「蛙なかまも、いずれ、さかり時の色事でございましょう、よく鳴きますな、調子に乗って、波を立てて鳴きますな、星が降ると言いますが、あの声をたたく雨は花はなびら片の音がします。」

月があると、昼間見た、畝うねに咲いた牡丹の影が、ここへ重かさなつて映るであろう。

「旦那。」

「……………」

妙に改つた声で、

「提灯が来ますな——むこうから提灯ですね。」

「人通りがあるね。」

「今時分、やっぱり在<sup>ざいかた</sup>方の人でしようね。」

娘分のいうのに、女房は黙つて見た。

温泉の町入口はずれと言つてもよからう、もう、あの釣橋より

も此方へ、土を二三尺離れて一つ灯<sup>とも</sup>れて来るのであるが、女連ば

かりとは言うまい、糸七にしても、これは、はじめ心着いたのが

土地のもので様子の方つた運転手で先<sup>ま</sup>ず可<sup>よ</sup>かつた、そうでないと、

いきなり目の前へ梟の腹で鬼火が燃えたように怯<sup>おび</sup>えたかも知れな

い。……見えるその提灯が、むくむくと灯<sup>とも</sup>れ据<sup>すわ</sup>つて、いびつに大<sup>おおき</sup>

い。……軒へ立てる高張<sup>たかはり</sup>は御存じの事と思う、やがてそのくらいだけれども、夜の瞬<sup>なわて</sup>のこんな時に、唯ばかりでは言い足りない。たとえば、翳<sup>かざ</sup>している雨の番傘をばさりと半分に切つて、ややふくらみを継足<sup>つぎた</sup>したと思えばいい。

樹蔭の加減か、雲が低いか、水濛<sup>すいもう</sup>が深いのか、持っているものの影さえなくて、その提灯ばかり。

つらつらつらつらと、動くのに濡色<sup>ぬれいろ</sup>が薄油に、ほの白く艶<sup>つや</sup>を取つて、降りそそぐ雨を露に散らして、細いしぶきを立てると、その飛ぶ露の光るような片輪にもう一つ宙にふうわりと仄<sup>ほの</sup>あかりの輪を大きく提灯の形に巻いて、かつそのずぶ濡の色を一息<sup>しっ</sup>に熟<sup>たわ</sup>と撓<sup>たわ</sup>めながら、風も添わずに寄つて来る。



姿が華奢きやしやだと、女一人くらいは影法師にして倒さかに吸込みさくみそう  
な提灯おおきの大きさだから、一寸ちよつと皆声のを※んだ。

「田の水が茫ぼうと映ります、あの明あかりだと、縞まだの斑まだだの、赤いのも  
居ますか、蛙の形あが顕あらわれて見えましような。」

運転手おおきがいうほど間近おおきになった。同時に自動車おおきが寐おおきている大な  
牛おおきのように、その灯影おおきを遮おおきつたと思うと、スツと提灯おおきが縮おおきまつて  
普通おおきの手提おおきに小さおおきくなった。汽車おおきが、その真似おおきをする古狸おおきを、線  
路おおきで轢おおき殺おおきしたという話おおきが僻地おおきにはいくらかもある。文化おおきが妖怪おおきを  
減おおきずるのである。が、すなおに思おおきえば、何かの都合おおきで図抜おおきけに大  
きく見おおきえた持手おおきが、吃驚おおきした拍子おおきにもとの姿おおきを顕おおきわしたのであ  
ろう。

「南無、觀世音……」

打念じたる、これを聞かれよ。……村方の人らしい、鳴きながらの蛙よりは、泥すつぽん鼈べんを抱いていそうな、雫しずくの垂る、雨蓑を深く着た、蓑だといつて、すぐに笠とは限らない、古帽子だか手拭だか煤けですつぱりと頭を包んだから目鼻も分らず、雨脚は濁らぬが古ぼけた形で一濡れになつて頭あわれたのが、——道巾は狭い、身近な女二人に擦違おうとして、ぎよツとしたように退すると立直つて提灯もちなを持直なおした。

音を潜めたように、登あしおと音を立てずに山際についてそのまま行ゆ過ぎきするのかと思うと、ひつたりと寄つて、運転手の肩越しに糸七の横顔へ提灯つぎだを突出した。

蛙かと思う目が二つ、くるツと映った。

すぐに、もとへ返して、今度は向う廻りに、娘分の顔へ提灯を上げた。

その時である、菩薩の名を唱えたのは——

「南無観世音。」

続けて又唱えた。

「南無観世音……」

この耳近な声に、娘分は湯上りに化粧した頸くびを垂れ、前髪でうつむいた、その白粉おしろいの香の雨に伝う白い顔に、一条ひとすじほんのりと紅を薄くさしたのは、近々と蓑の手の寄せた提灯の——模様かと見た——朱の映ったのである、……あとで聞くと、朱で、かな

だ、「こんばんは」と記したのであった。

このまざまざと口を聞くが、声のない挨拶には誰も口へ出して会釈を返す機を得なかつたが、菩薩の称号に、その娘分に続いて、糸七の女房も掌を合わせた。

「南無観世音……」

また繰返しながら、蓑の下の提灯は、洞ほらの口へ吸すわそるる如く、奥在所の口を見るうちに深く入つて、肩から裙すそへすばまつて、消えた。

「まるで嘲あざわら笑うようでしたな、帰りがけに、またあの梟めが、まだ鳴いています——爺い……老爺らしゆうございましたぜ。……爺も驚きましたろう、何しろ思いがけない雨のやみに第一ご婦

人です……気味の悪さに爺もお慈悲を願ったでしょうが、観音様のお庇かげで、此方が助かりました、……一息冷汗になりました。」  
すると車は早い。

「観音様は——男ですか、女でいらつしやるんでございますか。」  
響ひびきの応ずる如く、

「何とも言えない、うつくしい女のお姿ですわ。」

と、浅草寺せんそうじの月々のお茶湯日を、やがて満願に近く、三年の間一度も欠かさない姪がいった。

「まったく、そうなんでございますか、旦那。」

「それは、その、何だね……」

いい塩梅あんばいに、車は、雨もふりやんだ、青葉の陰の濡色の柱の

薄<sup>うつつ</sup>り青い、つつじのあかるい旅館の玄関へ入ったのである。

出迎えて口々にお飯<sup>かえ</sup>んなさいましをいうのに答えて、糸七が、

「唯<sup>ただいま</sup>今、夜遊<sup>よあそび</sup>の番傘<sup>もど</sup>が飯<sup>かえ</sup>りました——熊沢さん、今のはだね、

修禅寺の然るべき坊さんに聞きたまえ。」

天狗の火、魔の燈——いや、雨の夜の暇<sup>なわて</sup>で不思議な大きな提灯

を視<sup>み</sup>たからと言つて敢<sup>あえ</sup>て図に乗つて、妖怪を語ろうとするのでは

ない、却<sup>かえ</sup>つて、偶然<sup>ある</sup>の或場合にはそれが普通の影象らしい事を知

つて、糸七は一先<sup>ひとま</sup>ず読<sup>どく</sup>しやとともに安心をしたいと思うのである。

学問、といつては些<sup>ち</sup>と堅<sup>かた</sup>過ぎよう、勉強はすべきもの、本は読

むべきもので、後日、紀州に棲<sup>す</sup>まるる著名の碩<sup>せき</sup>学、南<sup>みな</sup>方<sup>かた</sup>熊<sup>くま</sup>

楠す氏の随筆を見ると、その龍燈ついでに就て、と云う一章の中に、おなじ紀州田辺いとかわこうだゆうの糸川恒太夫いとかわこうだゆうという老人、中年まで毎度野諸村を行商した、秋の末らしい……一夜、新鹿村みなとの湊みなとに宿る、この湊の川上に浅谷と称たとうるのがある、それと並んで二木嶋、片村、曾根と谿谷が続く二谷の間を、古来天狗道と呼んで少からず人の懼おそる処である。時に糸川老人の宿った夜は恰あたかも樹木挫折ひしおれ、屋根廂ひさしの摧くだけ飛とばんとする大風雨であつた、宿の主とても老夫婦で、客とともに揺れ撓む柱を抱き、僅わずかに板形の残つた天井下の三疊ばかりに立籠たてこもつた、と聞くさえ、……わけて熊野の僻村らしい……その佗おもしさが思遣おもいやられる。唯、ここに同郡羽鳥に住む老人の一人の甥、茶の木原に住む、その従弟を誘い、素裸に腹帯しを緊めて、

途中川二つ渡つて、伯父夫婦を見舞に來た、宿に着いたのは真夜中二時だ、と聞くさえ、その胆勇殆ど人間の類でない、が、暴風強雨如法の大闇黒中、かの二谷を呑んだ峯の上を、見るも大なる炬火廿ばかり、烈々として連り行くを仰いで、おなじ大暴風雨に処する村人の一行と知りながら、かかればこそ、天狗道の称が起つたのであると悟つて話したという、が、或は云う処のネルモの火か。

なお当の南方氏である、先年西牟婁郡安都ヶ峯下より坂泰の巔を躰え日高丹生川にて時を過ごしすぎられたのを、案じて安堵の山小屋より深切に多人数で捜しに來た、人数の中に提灯唯一つ灯したのが同氏の目には、ふと炬火数十束一度に併せ燃したほ



どに大きく見えた、と記されている。しかも嬉しい事には、談話  
 に続けて、続膝栗毛善光寺道中に、落合峠のくらやみに、例の弥  
 次郎兵衛、北八が、つれの獵夫の舌を縮めた天狗の話を、何だ鼻  
 高、さあ出て見ろ、その鼻を引ひきむし、搦いで小鳥の餌を磨すつてやろう、  
 というを待たず、獵夫の落した火繩たちま忽ち大木の梢に飛とびあが上り、た  
 った今まで吸殻ほどの火だったのが、またたくうちに松たいまつ明の大  
 さとなつて、枝も木の葉もざわざわと鳴つて燃上つたので、頭も  
 足も獵師もろとも一縮み、生命ばかりはお助け、と心底から涙：  
 …が可笑おかしい、とちめんや面屋きたりやと喜多利屋と、しやこ這個二人の吞気ものが、  
 一代のうちに唯一度であろうと思う……涙を流しつつ鼻高様に恐お  
それい入いつた、というのが、いまの南方氏の随筆に引いてある。

夜の燈火は、場所により、時とすると不思議の象を現わす事があるらしい。

幸に運転手が獵師でなかった、おんな婦たちが真先に梟の鳴声に恐れた殊勝さだったから、大きな提灯が無事に通った。

が、例を引き、因を説き蒙を啓く、もうひら大人の見識を表わすのには、南方氏の説話を聴聞することが少しばかり後れたのである。

実は、怪を語れば怪至る、風説をすれば影がさす——先哲の識語に鑿みて、温泉宿には薄暗い長廊下が続く処、人の居ない百畳敷などがあるから、逗留中、取り出ては大提灯の怪を繰返して言出さなかつたし、東京にかえ戻ればパツと皆消える……日記を出して話した処で、鉛筆の削屑ほども人が気に留めそうな事でない、おんな婦

たちも、そんな事より釜の底の火移りで翌日のお天気を占う方が忙しいから、ただそのままになって過ぎた。

翌年——それは秋の末である。糸七は同じ場所——三宝ヶ辻の夜目に同じ処におなじ提灯の頭あらわれたのを視みた。——

……そうは言つても第一季節は違ふ、蛙の鳴く頃ではなし、それにその時は女房ばかりが同伴の、それも宿に留守して、夜歩よあるき行をしたのは糸七一人だったのである。

夕餉ゆうげが少し晩おそくなって済んだ、女房は一風呂入ろうと云う、糸七は寐る前にと、その間をふらりと宿を出売、奥の院の道へ向つたが、

「まず、御一名——今晚は。」

と道しるべの石碑に挨拶をする、ほろよい微酔のいい機嫌……機嫌のいいのは、まだ一つ、上等のまきたばこ巻 蓑に火を点けた、勿論自費購求の品ではない、大連に居る友達が土産にくれたのが、素敵な薫りで一人その香を聞くのが惜い、おし燐寸マツチの燃えさしは路傍のこながれ小流に落したが、さらさらと行く水の中へ、ツと音がして消えるのが耳についたほど四辺はしずか静で。……あの釣橋、その三宝ヶ辻——一昨夜、例の提灯の暗くなつて隠れた山入の村を、とふとみまわしたが、今夜は素もとより降つてはいない、がさあ、幾日ぐらいの月だろうか、薄曇りに唯ほう茫として、暗くはないが月は見えない、星一つ影もささなかつた、風も吹かぬ。

煙草の薫が来たあとへも、ほんのりと残りそうので、袖にも匂う

……たまさかに吸つてふツと吹くのが、すらすらと向うへ靡くなびの  
に乗つて、なわた暇のほの白いのを踏むふともなしに、うかうかと前途な  
るその板橋を渡つた。

ここで見た景色を忘れない、苧あとの稲田は二三尺、濃い霧に  
包まれて、見渡すかぎり、一面の朧おぼろの中に薄煙を敷いた道が、ゆ  
るく、長く波形になつて遙々はるばると何処までともなく奥の院の雲の  
果まで、遠く近く、一むらの樹立こたちに絶えては続く。

その路筋を田の畔あぜ暇の左右に、一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、  
六つ、七つと順々に数えるとふわりと霧に包まれて、ぼうと末消うら  
えたのが浮いて出たようにまた一つ二つ三つ四つ五つ、稲塚――  
その稲塚が、ひよいひよいと、いや、実のあとといえれば気は軽い

けれども、夜気に沈んだ薄墨の石燈籠の大きな蓋のように何処までも行儀よく並んだのが、中絶えがしつ、雲の底に姿の見えない、月にかけて果知れぬ八ツ橋の状さまに視ながめられた。

四辺は、ものの、ただ霧おぼろの朧である。

糸七は、そうした橋を渡つた処に、うつかり恍惚うっとり たたずとイんだが、裾すそに近く流の音が沈んで聞こえる、その沈んだのが下から足を浮かすようで、余り静かなのが心細くなつた。

あの稲塚がむくむくと動き出しはしないか、一つ一つ大きな笠かぶつを被た狸になつて、やがては誘うなずい合い、頷うなずきかわし、寄合つて手を繋ぎ、振向いて見返るのもあつて、けたけたと笑わらいだ出したらどうだろう。……それはまだ与くみし易い。宿縁よに因つて仏法を信じ、

靈地を巡拝すると聞く、あの海豚いづるかの一群が野山の霧を泳いで順々に朦朧と列を整えて、ふかりふかりと浮いつ沈んつ音なく頭を進めるのに似て、稲塚の藁の形は一つ一つその頂いた幻おおきの大な笠の趣がある。……

いや、串じょうだん戯はではない、が、ふと、そんな事を思つたのも、余り夜ただ一色の底を、静しずかに揺つて動く流の音ただよに漾たわされて、心もうわの空になつたのであろう……と。

何も体裁を言うには当たらない、ぶちまけて言えば、馬鹿な、糸七は……狐狸こりとは言うまい——あたりを海洋に変えた霧みこに魅ままれそうになつたのであろう、そうらしい……

で幽谷の蘭の如く、一人で聞いていた、まきたばこ巻ま 蓑たばこを、其処から

引返しざまに流に棄てると、真紅な苔つぼみが消えるように、水までは届かず霧に吸われたのを確しかと見た。が、すぐに踏掛けた橋の土はふわふわと柔かな気がした。

それからである。

かかる折しも三宝ヶ辻で、また提灯に出会った。

もとの三宝ヶ辻まで引返すと、ちようどいつかの時と殆ど同じほとん

処、その温泉の町から折曲一つ折れて奥の院参道へあらたまる釣橋の袂へ提灯がふうわりと灯も灰ほのじろ白んで顕われた。

糸七は立停たちどまった。

忽然として、仁王が鷲掴みにするほど大きな提灯になろうも知れない。夜気は——夜気は略似ほほて居るが、いま雨は降らない、け



れども灯の角度が殆ど同じだから、当座仕込みなかたがくの南方学みなかたがくに教えられた処によれば、この場合、偶然エルモの火を心して見る事が出来ようと思つたのである。

——違う、提灯が動かない霧に据すわつたままの趣ながら、静しずかにやや此方へ近づいたと思うと、もう違うも違いすぎた——そんな、古蓑ほっかむで頬被ほっかむりをした親爺には似てもつかぬ。髪つやつやの艶つやつや々と黒いと、色のうつくしく白い顔が、丈たけだちすらりとして、ほんのり見える。

婦人が、いま時分、唯一人。

およそ、積つても知れるが、前刻、旅館を出てから今になるまで、糸七は人影にも逢わなかつた。成程、くらやみの底を抜けば

村の地へ足は着こう。が、一里あまり奥の院まで、曠野の杜を飛とびとび々びとびに心覚えの家数は六七軒と数えて十とおに足りない、この心細いびようばくものといえ、ただ遥々はるばると睨なわてを奥下りに連つた稲塚の数ばかりであるのに。——しかも村里の女性の風情では断じてない。

霧は濡ぬれいろ色の紗しゃを掛けた、それを透かえいて、却かえつて柳の薄い臙かえに、霞んだ藍か、いや、淡い紫を掛けたような衣の彩織で、しつとりともう一枚羽織はおなじよう、それよりも濃く黒いように見え

た。

時に、例の提灯である、それが膝のあたりだから、棲つまは消えた、そして、胸の帯が、空近くして猶なおか且つ雲の底に隠れた月影が、其

処にばかり映るように艶を消しながら白く光った。

唯、ここで言うのは、言うのさえ、余り町じみるが、あの背しよい負揚あげとか言うものの、灯の加減で映るのだろうか、ちらちらと……いや、霧が凝ったから、花片はなびら、緋の葉、そうは散らない、すつすつと細く、毛引けびきの雁かりがね金を紅で描いたように提灯に映るのが、透通すきとおるばかり美しい。

「今晚は。」

この静寂さ、いきなり声をかけて行違ゆきちがったら、耳元で雷……は威いがありすぎる、それこそ梟ほらが法螺を吹くほどに淑女を驚かそう、黙ってぬつと出たら、狸が泳ぐと思われよう。

ここは動かないでいるに限る。

第一、あの提灯の小山のように明るくなるのを、熟<sup>じっ</sup>として待つ筈だ。

糸七は、嘗<sup>かつ</sup>て熱海にも両三度入湯した事があつて、同地に知己の按摩がある。療治<sup>りょうぢ</sup>が達しやで、すこし目が見える、夜話<sup>やわ</sup>が実に巧い、職<sup>しやく</sup>がらで夜戸<sup>よと</sup>出が多い、そのいろいろな話であるが、先<sup>ま</sup>ず水口園の前の野原の真中で夜なかであつた、茫々とした草の中か、足もとへ、むくむくと牛の突立<sup>つった</sup>つように起上つた大漢<sup>おおおとこ</sup>子が、いきなり鼻の先へ大きな握<sup>にぎりこぶし</sup>拳<sup>つくだ</sup>を突出した、「マツチねえか。」

「身ぐるみ脱ぎます——あなたの前でございませうが。……何、この界限トンネル工事の労働しやが、酔<sup>よ</sup>払<sup>は</sup>つて寐<sup>ね</sup>ころがつていた奴<sup>やつ</sup>なんで。しかし、その時は自分でも身に覚えて、がたがたぶるぶ

ると震えてましてな、へい。」まだある、新温泉の別荘へ療治に行つたかえ販りがけ、それが、真夜中、時刻もちようどうしみつ丑満であつた、来きの宮神社へ上り口、新温泉は神社の裏山に開けたから、販みちり途の按摩さんには下口になる、ずいどう隧道の中で、今時、何と、うし丑の時参詣にまざまざと出会つた。黒髪を長く肩を分けて蓬おどろに捌さばいた、青白い、ほそおもて細面の婦おんなが、白装束といつても、浴衣らしい、寒の中に唯一枚、糸杵いとすに立てると聞いた蠟燭を、裸火で、それを左に灯して、右手に提げたのは鉄てつ槌つに違ちがひない。さて、藁人形わらにんぎよと思うのは白布で、小箱を包んだのを乳ちちの下鳩みずおち尾へ首くびから釣つした、頬ほへ乱れた捌さば髪かみが、その白色を蛇へびのように這つたのが、あるくにつれて、ぬらぬら動くのが蠟燭の灯の揺れるのに映ると

思うと、その毛筋へぼたぼたと血の滴るようには見えたのは、約束の口に啣くわえた、その耳まで裂けるという梳櫛すきぐしのしかもそれが燃えるような朱塗であつた。いや、その姿が真の闇暗くらやみの隧道の天井を貫くばかり、行違ゆきちがつた時、すつくりと大きくなつて、目前を通る、白い跣足はだしが宿の池にありましよう、小さな船。あれへ、霜が降つたように見えた、「私は腰を抜かして、のめつたのです。あの釘を打込む時は、杉だか、樟くすだか、その樹の梢へその青白い大きな顔が乗りましよう。」というのである。

——まだある、秋の末で、その夜は網代あじろの郷の旧大荘屋の内へ療治を頼まれた。旗桜の名所のある山越しやうけいの捷しやうけい 徑は、今は茅萱ちがやに埋もれて、人の往来は殆どない、伊東通い新道の、あの海岸を

辿つて販つた、その時も夜更よふけであつた。

やがて二時か。

もう、網代の大荘屋を出た時から、途中松風と浪ばかり、路みちに落ちた緋あかい木の葉も動かない、月は皎々こうこう、昭々しょうしょうとして、磯際いそぎの巖も一つ一つ紫水晶のように見えて山際の雑樹ぞうきが青い、穿はいた下駄の古鼻緒も霜を置くかと白く冴えた。

……牡丹は持たねど越後の獅子は……いや、そうではない、嗜たしなみがあつたら、何とか石橋しやつきようでも口誦くちずさんだであらう、途中、目の下に細く白浪の糸を乱して崖に添つて橋を架けた処がある、その崖には滝が掛かつて橋の下は淵になつた所がある、熱海から網代へ通る海岸の此処は言わば絶所である。按摩さんがちようどその

橋を渡りかかると、浦添うらぞえを曲る山の根に突出つぎでた巖いわ膚はだに響いて、カラカラコロコロと、冴えた駒下駄の音が聞こえて、ふと此方の足の淀む間に、その音が流れるように、もう近い、勘でも知れる、確たしかに若い婦おんなだと思つたと悚然ぞつとした。

寐鳥ねどりの羽音一つしない、かかる真夜中に若い婦おんなが。按摩さんに、それ、嘗かつて丑の時詣のもの凄いい経験がある、そうではなくても、いずれ一生懸命おんなの婦おんなにも突詰つきつめた絶壁の場合だと思つたと、忽たちまち颯さつと殺気を浴びて、あとへも前さきへも足が縮んだ、右へのめれば海へ転がる、左へ転べば淵へ落ちる。杖を両手に犇ひしと搦んで根を極きめ、がツしりと腰を据え、欄干のない橋際を前へ九分ばかり譲つて、其処をお通り下さりませ、で、一分だけわがものに背筋へ



滝の音を浴びて踞しゃがんで、うつくしい魔の通るのを堪こらえて待ったそ  
うである。それがまた長い間なのでございますよ、あなたの前で  
ございますが。カラン、コロンが直じき其処じこにきこえたと思いまし  
たのが、実はその何とも寂然しんとした月夜なので、遠くから響いた  
ので、御本体は遥はるかに遠い、お渡りに手間が取れます、寒さは寒し、  
さあ、そうなりますと、がっがっごうごうという滝の音ともろと  
もに、ぶるぶるがたがたと、ふるえがとまらなかつたのでござい  
ますが、話のようで、飛んでもない、何、あなた、ここに月つきあか  
明りに一人、橋に噛りついた男が居るのに、そのカラコロの調子  
一つ乱さないで、やがて澄すまして通とおり過ぎますのを、さあ、鬼か、  
魔か、と事も大層に聞こえましようけれども、まったく、そんな

気がいたしましてな、千鈞せんきんの重さで、すくんだ頸首くびへ獅嚙しがみつ  
いて離れようとしません、世間様へお附合ばかり少々櫛目を入れ  
ましたこの素頭すあたまを捻向ねじむけて見ました処が、何と拍子ぬけにも何  
にも、銀杏返いちようがえしの中背の若い婦で……娘でございますよ、妙齡  
の——姉さん、姉さん——私は此方が肝を冷しましただけ、余り  
に対手あいての澄して行くのに、口惜くなつて、——今時分一人で何処  
へ行きなさる、——いいえ、あの、網代かえへ皈かえるんでございますと  
言います、農家の娘で、野良仕事の手伝を済ました晩過ぎてから、  
裁縫のお稽古に熱海まで通うんだとまた申します、痩せた按摩だ  
が、大の男だ、それがさ、活きた心地はなかつた、というのに、  
お前さん、いい度胸だ、よく可怖こわくないね、といますとな、お

つかさんに聞きました、簪かんざしを逆手に取れば、婦は何にも可恐こわくはないと、いたずらをする奴の目の球を狙うんだって、キラリと、それ、ああ、危い、この上目を狙われて堪たまるもんでございますか、もう片手に抜いて持っていたでございますよ、串じょうだん戯ごじゃありません、裁縫がえりの網代の娘と分つても、そのうつくしい顔と、いい容ようす子こといい、月夜の真夜中、折からと申し……といつて揉み分けながらその聞手ききての糸七の背筋へ頭を下げた。観音様のお腰元か、弁天様のお使姫、当の娘の裁縫というのによれば、そのままあまくだ天降あまくだった織姫のよう思われてならない、というのである。

こうした話、いずれの場合にも、あつてしかるべき、冒険の功名と、武勇の勝利がともなわれない、熱海のこの按摩さんは一

種の人格しやと言つてもいい、学んでしかるべしだ。

——ところ処で、いま、修禪寺奥の院道の三宝ヶ辻に於ける糸七の場合である。

夜の霧なかに、ほのかな提灯の灯とともに近づくおぼろにうつ  
くしい婦おんなの姿に対した。

糸七はそのまま人格しやの例に習つた、が、按摩でないだけに、  
姿勢は渠かれと反対に道を前にして洋杖ステッキを膝に取つた、突出つぎだしては  
通る人の裳もすそを妨げそうだから。で、道端へ踞しゃがんだのである。

がさがさと、踞しゃがみこ込む、その背筋へ触るのが、苳かりのこ残しの小

さな茄子畠うねで……そういえば、いつか番傘で蛙を聞いた時ここに  
畝うね近く蚕豆そらまめの植つていたと思う……もう提灯が前を行く……そ

の灯とともに、枯莖に残った渋い紫の小さな茄子が、眉をたたき耳を打つ礫つぶての如く目を遮るとばかりの隙ひまに、婦の姿は通過とおりすぎた。や、一人でない、銀杏返いちようがえしの中背なのが、添そいなら並んでと見送つたのは、按摩さんの話にくつつけた幻覚で、無論唯一人、中背などというよりは、すつとすらりと背が高い、そして、気高く、姿に威がある。

その姿が山やま入まいりの真暗な村へは向かず、道の折めを、やや袖ななめに奥の院へ通う橋の方へ、あの、道下り奥入りに、揃えて順々に行方も遙かに心細く思われた、稲塚の数も段々に遠い処へ向つたのである。

釣橋の方からはじめは左の袖だった提灯が、そうだ、その時ち

らりと見た、糸七の前を通る前後を知らぬ間に持替もちかえたらしい、いまその袂とに灯ともれる。

その今も消えないで、反かえつて、色の明くなつた、ちらちらと映る小さな紅は、羽をつないで、二つつづいた赤蜻蛉あかとんぼで、形が浮くようで、沈んだようで、ありのままの赤蜻蛉か、提灯に描いた画か、見る目には定まらないが、態すがたは鮮明に、その羽摺うれに霧がほぐれるように、尾花の白い穂なびが靡なびいて、幽かすかな音の伝つうばかり、二つの紅い条すじが道芝の露つゆに濡ぬれつつ、薄い桃色に見えて行く。







## 青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 泉鏡花集 黒壁」ちくま文庫、筑摩書房

2006（平成18）年10月10日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十四卷」岩波書店

1940（昭和15）年6月30日

初出：「文藝春秋」

1939（昭和14）年11月号

※「睨」に対するルビの「なわて」と「なわた」の混在は、底本通りです。

入力：門田裕志

校正：坂本真一

2017年1月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 遺稿 遺稿

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 泉鏡花

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>